

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520099

研究課題名(和文) フランチェスコ・ディ・ジョルジョの芸術 - 15世紀後半シエナとウルビーノの芸術交流

研究課題名(英文) The Art of Francesco di Giorgio- artistic exchanges between Siena and Urbino in the second half of the 15th century

研究代表者

上村 清雄 (Uemura, Kiyoo)

千葉大学・普遍教育センター・教授

研究者番号：60344959

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：15世紀シエナのルネサンス美術の特質を探究するために、シエナ出身の建築家、画家、彫刻家、芸術理論家フランチェスコ・ディ・ジョルジョ(1439 - 1502)および彼の共同制作者である同じくシエナ出身の寄木細工(インタルシア)作家アントニオ・バリリ(1453 - 1516)のウルビーノを中心とするマルケ地方での活動をあつづけた。特にウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレ内部の門扉など寄木細工による建築表現と通例「理想都市」と呼ばれる三点の都市景観を表した板絵を比較し二作品にフランチェスコの関与を指摘した。またマルケ地方ファーノのサンタ・マリア・ヌオーヴァ聖堂内寄木細工装飾を熟覧しバリリ芸術の展開を考察した。

研究成果の概要(英文)：In order to deepen our knowledge of the characters of the Sienese Art in the 15th century, we analyzed artistic activities at Urbino and other cities in the Marche region, of Francesco di Giorgio, architect, painter, sculptor and art theorist, and of Antonio Barili, sienese intarsiatore and collaborator of Francesco di Giorgio. Confronting the intarsia vedute in the doors of the Ducal Palace at Urbino with three panels representing 'Ideal City', we concluded that two panels are executed by the workshop of Francesco di Giorgio.

In addition, with the careful observation on the intarsia works in the church of Santa Maria Nuova at Fano in the Marche region, we examined the artistic developments of Antonio Barili.

研究分野：美術史

キーワード：フランチェスコ・ディ・ジョルジョ アントニオ・バリリ シエナ ウルビーノ インタルシア 理想都市

1. 研究開始当初の背景

イタリア中部トスカーナ地方に位置するシエナは、ゴシック美術の影響を色濃く残す都市として従来みなされてきた。しかしながら近年において、15世紀シエナに、内面に迫る人間表現や遠近法に根ざす鋭敏な空間描写を達成したルネサンス美術がまさに展開したことが明らかにされている。

この動向を踏まえてシエナ美術の特性は何かという、古くも新しい問いに直面するに到った筆者は、シエナの地理的そして文化的な境界を越えて活躍したフランチェスコ・ディ・ジョルジョ (1439-1502) 芸術の独自性と重要性を再認識するにいたった。

2. 研究の目的

筆者が本研究で注目するのは、フランチェスコ・ディ・ジョルジョが君主である公爵フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロ (1422-1482) に招聘され赴いたマルケ地方の都市ウルビーノである。フランチェスコは造営中のパラッツォ・ドゥカーレのみならず、フェデリーコのために城砦を含む多くの建築を設計している。あわせて、彫刻作品や「理想都市」と呼び慣わされている都市の景観を描いた板絵の制作に関わり、そしてパラッツォ・ドゥカーレ内部の名高いストゥディオオーロ (書斎) に、フィレンツェの芸術家たちが大部分を制作しているインタルシア (寄木芸術) 装飾の造営を引き継ぎ、新たに下絵を提供している。彼とともにシエナから画家ピエトロ・ディ・フランチェスコ・オリオーリ (1458-1496)、同じく彫刻家で大聖堂造営主任になるジョヴァンニ・ディ・ステファノ (1440頃-1502 まで記録) 寄木芸術家のアントニオ・バリリ (1453-1516) などがウルビーノを訪れ、パラッツォ・ドゥカーレの内部装飾に従事したのみならず、たとえばバリリはファーノ、ペーザロというマルケ地方の都市の聖堂内陣席に寄木芸術による装飾を制作するなど幅広い活動をおこなっている。

一方これらシエナ出身の芸術家は、アンドレ・シャステルが「数学的人文主義」と定義し、ピエロ・デッラ・フランチェスカ (1410/20頃-1492) が重要な役割を果たしたウルビーノ文化を代表する、科学的な遠近法表現にもとづく優れた空間意識に富んだ造形をこの地で深く学んだ。シエナに戻ってからは、シエナの政治を主導するパンドルフォ・ペトルッチおよび彼の友人シエナ大聖堂総務局長アルベルト・アリンギエーリの庇護をうけ、大聖堂内に増築されたサン・ジョヴァンニ礼拝堂の彫刻、絵画、そしてインタルシア装飾を手がけるなどウルビーノで学んだ新しい表現をシエナにもたらしている。

本研究は以上の問題関心から、フランチェスコ・ディ・ジョルジョの芸術に注目しながら、彼の指導のもとにシエナの芸術家がウルビーノにもたらした影響と、逆にウルビーノ文化が育んだ造形がシエナにどのように受容されたかを検討し、15世紀シエナ芸術における独創性を考察することを目指している。

3. 研究の方法

本研究が採る方法は主に以下の三点である。

(1) フランチェスコ・ディ・ジョルジョがウルビーノで従事した芸術活動を、パラッツォ・ドゥカーレ内部のストゥディオオーロのインタルシア装飾および同パラッツォ内の公爵妃寝室の扉などに用いられたインタルシア装飾と比較検討することで、15世紀後半シエナとウルビーノの芸術交流を概観する。

(2) ウルビーノの「数学的人文主義」がもたらした成果のひとつである、現在ウルビーノの国立マルケ美術館、ボルティモアのウォーターズ美術館、そしてベルリンの国立美術館・絵画館にそれぞれ所蔵されている遠近法によって描かれた都市の景観図、通例「理想都市」と呼び慣わされている三枚の板絵を採りあげる。これらの板絵を成り立たせてい

る芸術伝統との関連を考察し、特にフランチェスコ・ディ・ジョルジョを中心にシエナ芸術との関係に注目する。あわせてこれらの板絵が当初果たした役割を検討する。

(3) フランチェスコ・ディ・ジョルジョと並んでウルビーノをはじめとするマルケ地方で活躍したアントニオ・バリリの芸術を考察する。彼がファーノのサンタ・マリア・ヌオーヴァ聖堂内陣席に寄木芸術によって制作した静物表現、あるいはバリリの関与の可能性が指摘されているペーザロはサンタゴスティーノ聖堂の寄木芸術による内陣席を検討し、マルケ地方に果たしたフランチェスコ工房の具体的な貢献をあとづける。以上を踏まえて、現在はシエナ南部サン・クイリコ・ドルチャの聖堂参事会聖堂に移築されている、かつて、1483年より造営が始まるシエナ大聖堂内サン・ジョヴァンニ礼拝堂内部を飾ったインタルシアによる装飾を考察してシエナの芸術家たちがウルビーノ体験によって何を学んだのかをまとめる。

4. 研究成果

(1) 15世紀後半シエナとウルビーノの芸術

ウルビーノの君主フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロは、1460年代にウルビーノに建つ彼の宮殿パラッツォ・ドゥカーレの改築に着手し、1468年7月にダルマティア地方出身の「マエストロ・ラウラーナ」に技師として、そしてウルビーノの「都市」そのものを美化する計画の監督者として任命する認可証をあたえている。1472年にラウラーナがウルビーノを去ると後任にシエナ出身の芸術家フランチェスコ・ディ・ジョルジョが選ばれ、彼はおそらく1475年から1482年までに寄木芸術、絵画、彫刻によって飾られた理想的な君主の住館としてウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレを完成している。フィレンツェの芸術家たちが大部分を仕上げ

いたパラッツォ・ドゥカーレ内部のストゥディオオーロ(書斎)のインタルシアによる装飾にもフランチェスコ・ディ・ジョルジョは下絵を提供している。ストゥディオオーロ東壁南側の区画には中央に書見台が置かれた空間が表わされている。この区画はまるで「ストゥディオオーロのなかのストゥディオオーロ」と呼びたくなるほど奥に向かう新たな「空間の豊かな広がり」があたえられている。同じ鋭敏な空間描写は、パラッツォ・ドゥカーレ内「公爵妃の寝室」、「天使の間」、「公爵の寝室」の扉を飾るインタルシア装飾に表現された都市景観に見ることができる。

(2) 遠近法による景観図(「理想都市」を表した三枚の板絵

遠近法に従って構成された建築が並ぶ都市景観を表した横長の板絵が、現在ウルビーノの国立マルケ美術館、ボルティモアのウォーターズ美術館、そしてベルリンの国立美術館・絵画館にそれぞれ所蔵されている。以下それぞれの作品を検討したい。

国立マルケ美術館の板絵

国立マルケ美術館に展示されている板絵についてはウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレの18世紀に編まれた目録に記載されるまで消息が知られていない。しかしながら建築の描写にピエロ・デッラ・フランチェスカが遺した理論書に添えられたいくつかの挿図が用いられていることからピエロの関与のもとにウルビーノの地で制作されたと考えられる。遠近法によって表現された厳格な数理的な空間の構想に際して、ウィトルウィウスが定式化しアルベルティが吟味を加えた原則に従いながら、古代の演劇(コンメディア)に用いられた場面を表す意図があったと指摘がなされている。一切人物像は表現されていない。しかしながら、板絵の中央に

表された屋根の頂に十字架を配した聖堂は正面入口の片側扉が開け放たれ人間の関与をうかがわせる。建物のコーニスの上に留まるつがいの鳩は、ウルビーノの宮廷で愛好されたネーデルラント絵画に特徴的な細部表現を思わせながら、バルコニーに置かれた壺に活けられた植物とともに都市に住まう人間の営みを暗示する、舞台美術にふさわしい点景を構成している。建築の背後左右に覗く風景も演劇の背景に不可欠な要素である。

先に言及したパラッツォ・ドゥカーレの目録では板絵の作者として、ウルビーノでピエロの影響の下で芸術形成を遂げた画家 = 建築家ブラマンテ(1444 - 1514)の名前が挙げられているのは示唆的であろう。

ウォーターズ美術館の作品

中央奥に浮彫が表されたローマの凱旋門、左側にコロッセオに想を得たと考えられる円形の建築、右側に尖塔を具えた多角形の建物が描かれている。画面手前には石のパネルで舗装された広場が広がり、中央にクビドの彫像を戴く噴水が表され、その四方は枢要徳を表現する寓意像によって囲まれている。正確には、三つの枢要徳である「剛毅」、「節制」、「正義」、そして残る枢要徳「賢明」に代わって「豊穡」の彫像が配されている。尖塔を持つ多角形の建物がフィレンツェの洗礼堂を思わせ、「豊穡」の彫像がフィレンツェの旧市場にドナテッロ(1386-1466)が立てた同主題の彫像を彷彿させるとはいえ、ピエロがウルビーノで育んだ遠近法文化が生み出した、おそらく国立マルケ美術館の作品を参照しながら制作された作品であることは間違いない。

従来本作品は国立マルケ美術館所蔵作品と一緒に考察されることが多かった。しかしながら全体の空間構成という観点から見ると大きな違いを両作品に指摘することができる。すなわちウルビーノ作品では広場奥に

聳える建築は閉ざされ、ボルティモア作品の凱旋門のように開口部から背後に広がる空間を見ることはかなわない。その点で従来別個に検討される機会が多かったベルリンの作品ではまさに手前に位置する柱廊越しに望む都市光景が表現されている点で、ボルティモア作品との共通性を指摘することができる。ボルティモア作品では凱旋門の後ろに展開している光景がベルリンの作品ではまさに主役を務めていると言えるだろう。

ベルリン国立美術館、絵画館の作品

本作品は板絵の上下に同時代の額縁が残されている点で重要である。下部は木製のパネルを模して描かれ装飾要素として三つの長方形の枠が表されている。ほかの二作品にもこのような額縁が付けられ、おそらく室内に置かれる家具として壁に据え付けられたと考えられる。当時これを見た人びとは室内に広がる、現実の建物と虚構の建物が入り交じった都市光景を楽しみ、劇場で演じられた、あるいは上演される数かずの演劇に思いを馳せたのであろうか。

本作品を構成する遠近法の消失点には海港から船出し遠くに進む小さな舟が重ねられている。その手前には海上にいる数隻の帆船が見える。ウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレの造営を引き継ぎ、1476年から1490年頃までウルビーノに定住したフランチェスコ・ディ・ジョルジョは舟の往来する港の賑わいを素描に描いている。彼とともにウルビーノに赴いたピエトロ・ディ・フランチェスコ・オリオーリがシエナに戻ってから同地の洗礼堂に描いた壁画にも画面奥に舟が浮かぶ港の光景が展開している。ウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレ内「公爵の寝室」の扉を飾るイタルシア装飾で表された都市空間の背後を彩るのも帆船が蟄集する姿である。さらにこの扉だけでなく、「天使の間」の扉にも、本作品の両脇を明快に縁どる溝が

つけられた角柱を見出すことができる。

すでにボルティモア作品に指摘した、柱廊越しに望む視角は、現実にウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレの回廊を引き立てる主要な要素であるだけでなく、画面の左右に展開する建築物の奥にあらたに光景を覗かせる造形は、フランチェスコ・ディ・ジョルジョが携わった同パラッツォ門扉のインタルシア装飾に表された都市光景にも、彼がシエナに戻った後に制作した絵画作品でも顕著な特色となっている。本作品とボルティモア作品とがフランチェスコ・ディ・ジョルジョが提供した下絵をもとに彼の工房が制作したとする仮説は説得力があると筆者は考える。

(3) アントニオ・バリリをめぐって

1483年1月16日シエナ大聖堂総務局長アルベルト・アリンギエーリは同礼拝堂内部の壁面全体を飾る木製のインタルシア装飾を依頼している。しかしながらそれから7年を経てようやく必要な木材が調達され、完成は1504年を待たなければならなかった。八角形の礼拝堂内部壁を飾る聖人、家具調度、本、楽器などを表したインタルシア装飾を制作したのはシエナの寄木芸術家アントニオ・バリリである。残念ながらそのうちの7枚のみが今日シエナの南サン・クィリコ・ドルチャの聖堂内聖堂に現存している。

さらに8枚目のパネルがシエナのバンディーニ=ピッコローミニ家のコレクションに長く所蔵された後1869年にウィーンのオーストリア芸術・産業博物館に収められた。残念ながら第二次世界大戦中に破壊されたこのパネルには窓辺で木の板を刻む半身の人物像が表されている。寄木芸術家としての「自刻像」をシエナ大聖堂の聖遺物が祀られている聖なる空間に誇示することが許されるほどバリリ芸術は当時高く評価されていたことが理解できる。

ファーノ、サンタ・マリア・ヌオーヴァ聖堂の《寄木芸術による内陣席》

マルケ地方のファーノにあるサンタ・マリア・ヌオーヴァ聖堂の内陣席のインタルシアによる装飾は1484年にアントニオとアンドレアのバリリ兄弟に委ねられ、1489年に完成したことが史料からわかる。残念ながら1944年にドイツ軍の爆撃によって損傷し再建されたため往時の姿を必ずしも伝えていないとはいえ、シエナ大聖堂以前にバリリが達成したインタルシア装飾の実際を確認することができるだろう。バリリ兄弟をマルケ地方に導いたのは1476年からウルビーノに滞在したフランチェスコ・ディ・ジョルジョであったと考えられる。事実シエナ近郊マチェレーの橋をアントニオが建築家フランチェスコ・ディ・ジョルジョとともに再建したとき、彼の「同輩」とアントニオは記されている。さらにアントニオがウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレ内部の装飾に関わったアンブロジーオ・パロッチ芸術を知悉していたことは、この内陣席肘掛け側面に自在に展開する蔓草模様や木の実をついばむ鳥のモチーフの採用などからもうかがえる。

現存する20のパネルにはインタルシアによって静物、風景が表されている。窓から見える風景が表現されているものの、少し後に制作されたと考えられるペーザ口のサンタゴスティーノ聖堂とは異なり、建築そのものや人物の姿は表されていない。しかしながら植物の葉によって彩色された茶色の濃淡と緑色による巧みな配色はアントニオが得意とする色彩効果をすでに示している。

ペーザ口、サンタゴスティーノ聖堂の《寄木芸術による内陣席》

内陣席は上下三層に分かれインタルシア装飾が施されている。中央の区画にはペーザ口のパラッツォ・ドゥカーレをはじめとする建築や、城塞が見える風景を背景にして樹木

に留まる一羽のヒワなどが、窓から眺めた光景という虚構のもとに表現されている。イタルシア装飾の下絵を提供した画家として同じくシエナ出身でフランチェスコ・ディ・ジョルジョとともにウルビーノに滞在したピエトロ・ディ・フランチェスコ・オリオーリをアンジェリーニは提案している。現在シエナの国立絵画館に所蔵されているオリオーリ作品の細部、例えば天使が手にする果物皿の端からあふれる植物の表現にはペーザ口のイタルシアと同じ律動感が感じられないだろうか。そして、明暗の対比をさらに強調する色彩表現は寄木芸術家としてのアントニオの成長を物語っている。

サン・クイリコ・ドルチャ、聖堂参事会聖堂の《寄木芸術による内陣席》(シエナ、大聖堂サン・ジョヴァンニ礼拝堂より招来)

上述したバリリの「自刻像」がかつて配されたイタルシア装飾である。現存するパネルのなかで、とりわけ驚かされるのは、背中だけを見せる、洗礼者聖ヨハネの弟子と目される人物の姿であろう。手すりに置いた左腕を大きく曲げるこの男性の頭部はほとんど横顔で表現され、わずかに見える目と鼻の造形はバリリの卓越した手腕のみならず、遠近法にもとづく短縮表現に熟達した下絵を提供した芸術家の存在をうかがわせる。寄木芸術の工具が見える棚を表わした一枚のパネル以外のすべてのパネルには、背後にアーチを具えた壁体の存在が明示されている。アーチからは奥に広がる遠景をくっきりと目にすることができる。すでに言及したように、建築の開口部を通して望む風景を表現する手法はフランチェスコ・ディ・ジョルジョが下絵をあたえたと考えられるウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレ内イタルシア装飾の都市光景、そしてボルティモアとベルリンに所蔵されている遠近法による都市景観に顕著に見られる特徴であった。さらに、バリ

リの「自刻像」の背後に広がる樹木に羽を休める鳥などの細部は、まさにペーザ口の別のイタルシア装飾をそしてすでに言及したオリオーリ作品の細部を思わせる。ウルビーノそしてファーノの作例との密接なつながりは、バリリに下絵をあたえた人物として、しばしば提案されるルカ・シニョレリ(1445 頃—1523)よりもオリオーリとするアンジェリーニの見解がより説得力をもつと筆者は考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

上村清雄、《化粧するプシュケ》制作されなかったラファエッロの作品、人文社会科学研究科研究プロジェクト、査読無、第 294 集、2015、pp.1-11

上村清雄、《蟹に咬まれた男の子》ソフォニスバ・アンギッソラとミケランジェロ・ブオナローティ、人文社会科学研究科研究プロジェクト、査読無、第 279 集、2014、pp.13-25

上村清雄、フィレンツェとミケランジェロ 天才を育んだ芸術都市、システーナ礼拝堂 500 年祭記念 ミケランジェロ展 天才の軌跡(展覧会カタログ)、査読無、2013、pp.31-39

上村清雄、ジュリオへの謬見 ラファエッロ対ジュリオ・ロマーノ、人文社会科学研究科研究プロジェクト、査読無、第 259 集、2013、pp.30-41

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 5 件)

上村清雄 他、ありな書房、嗅覚のイコノグラフィア、2014、298

上村清雄 他、ありな書房、触覚のイコノグラフィア、2014、282

上村清雄 他、ありな書房、聴覚のイコノグラフィア、2013、254

上村清雄 他、ありな書房、フレスコ画の身体学、2012、638

上村清雄 他、ありな書房、味覚のイコノグラフィア、2012、286

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上村 清雄 (UEMURA, Kiyoo)

千葉大学・普遍教育センター・教授

研究者番号：60344959